

令和7年度 第3回 都民を対象としたテーマ別環境学習講座報告

「妖怪とモッタイナイ～付喪神はさすてなぶる?～」

□実施日時

令和8年1月24日(土) 14:30～17:00

□実施方法

東京都環境公社 会議室(錦糸町)

□実施内容

1. 事務連絡・開講挨拶等

- ・事務局から受講上の注意、全体スケジュール等の説明

2. 【講演】妖怪とモッタイナイ—付喪神はさすてなぶる?—

(講師) 國學院大學 文学部 日本文学科 教授

飯倉義之 (いいくら よしゆき) 氏

1975年、千葉県生。國學院大學文学部教授。専門分野は口承文芸学、現代民俗論。編著に『現代を生きる怪異・妖怪』(河出書房新社)、共編著に『日本怪異妖怪大事典』(東京堂出版)、『47都道府県妖怪伝承百科』(丸善出版)など。



・「妖怪」とは、もともと「怪しいもの・こと」を表す言葉で、今でいう妖怪だけではなく、泥棒などの怪しい人も「妖怪」と呼ぶことができた。

・「妖怪」が自然なものを対象とし始めたのは、「明治以降」

明治時代：井上円了が「妖怪学を提唱」

不思議なモノ・コトに対して「妖怪」を使用

江戸時代：主に「化け物」を使用。子どもは幼児語の

「お化け」を使った。

↓江戸以前

中世：不思議なことは天狗の仕業

中古：「もののけ」が活躍、「鬼」も健在

古代：「鬼」、「悪しき神」の時代



・古代～中古は鬼や物の怪への真剣な恐怖があり、その物を目に見える形で残すこと（図像化）は不吉を呼ぶとしてされなかった。

少例として仏典や漢籍の鬼は図像化されていた。（鬼瓦等）

・平安末期頃から見えないモノたちは描かれ始めた。

（例：『不動利益縁起』）

- ・悪神・疫神・御霊などの図像化
- ・式神や護法童子など法力の図像化



『不動利益縁起』

安倍晴明が祭壇に祀って調伏している外道（疫病を起しているモノ）と、晴明の付き従える式神が描かれる

・色々な見えないものが図像化される中、『土蜘蛛草紙』（江戸後期、日文研蔵）に個性的な器物の化け物が登場

『土蜘蛛草紙』…源頼光と渡辺綱が荒れ果てた屋敷でさまざまな化物に出会い、土蜘蛛を退治する。



『土蜘蛛草紙』

・『百鬼夜行絵巻』では独創的な付喪神たちの図像を創造されるなど、絵師のイマジネーションによる「百鬼」の姿形のユニークさの追求が自由な造形を生み出し、怖い百鬼から面白いに変化していった。



『百鬼夜行絵巻』

・その後江戸時代に入り、「妖怪」の絵が新しい楽しみ方として広がる。

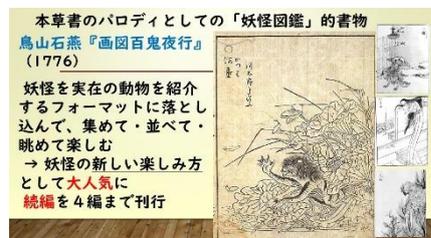
「画図百鬼夜行」は現代の図鑑のフォーマットに落とし込み作成されたもので、4編まで刊行された。その中の「百器徒然袋」は、付喪神だけを集めた妖怪図鑑である。

おもちゃ絵や今でいうシールなどにも、唐傘などの妖怪が描かれていた。

昔話にも古道具が化けて出るのもあり、小泉八雲のちりめん本にも『ちんちん小袴』では、物を大事にしなかったために出てきた付喪神が登場する。

・ここまで広がった付喪神だが、香川雅信氏は論文『『付喪神』はいなかった～日本における『器物の怪』の不在について～（『REKIHAKU』11,国立歴史民俗博物館,2024）において、下記の理由から付喪神は居なかったとしている。

- ・「付喪神」は歌語「九十九髪」にかけた言葉遊び
- ・『付喪神記』『百鬼夜行絵巻』『百器徒然袋』は創作
- ・おもちゃ絵の器物の化け物にはストーリーがない
- ・昔話も時間や場所を規定しないフィクション
- ・付喪神／器物の怪との目撃遭遇譚が伝承されていない



・では、付喪神はいなかったのか？
 ・「付喪神」はいなかったかもしれないが、下記の理由からモノを大事に「始末」しないと「化けて出る」「罰が当たる」感覚が生まれ、広がったと考えられる。

★まだ使えるモノを無駄にする・捨てることの罪悪感

「もったいない (勿体無い)」

勿体とは、正体（正体を失っている、大事なことを失う）の逆で、「不都合である・不届きである」という意味がある。



「自分に過大な評価がなされ有難い」

「正しく使われずに無駄にされて惜しい」の意が派生



モノにきちんと「始末」をつけるという感覚



物事を計画的・合理的に行い、
 節約を心がけ、浪費をしないようにする態度の人
 = 「始末のいい人」

★江戸は循環型（徹底リサイクル）社会であった

- ・直す職業の数々：いかけ屋・雪駄直し・羅宇屋 etc
- ・回収業も多彩：屑屋・灰買い・ろうそく買い etc

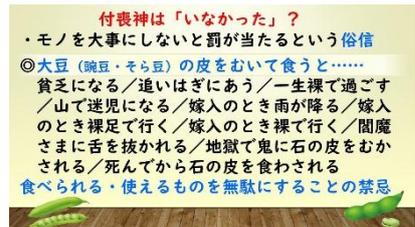
★昔は「モノ＞時間の価値感」

- ・しかし現代は自分で「始末」をつけることがとても難しい。
- ・個人では直せない素材・部品
- ・自然に還らない材料・個人で処理できない材料
- ・買った方が時間やお金の「節約」になってしまう 等

現代のわたしたちはなかなか「始末」をつけられない

「付喪神」は現代にこそ出現してしまうのかも

- ・付喪神を「いなかった」ままにするには
「大事に使う」と同時に「必要かモノか考える」「選んで使う」「捨て方を意識する」など現代においては「モノに振り回されない」意識が重要なかもしれない。



食べ物を大切にしないと
 起こるとされたことの例



【質疑応答】

Q：海外では付喪神のような考え方はあるのでしょうか。

A：ヨーロッパでは、神様が地球や生き物を創造したという考え方が根付いており、人間が作ったものはそれに比べて位が低いと考えられる傾向があります。そのため、日本の付喪神のように、物に魂が宿るといった考え方はあまり見られません。

一方で、アフリカなどの暑い地域では、気候の影響から物が長持ちせず（腐敗など）、物を貯蓄する文化があまり発展していません。そのため、物への執着心が比較的少なく、物に特別な価値を感じる考え方には結びつきにくいようです。

それに対して、アジアでは、比較的物を貯蓄しやすい環境であったことから、物を大切にする文化が育まれたのかもしれませんが。「モッタイナイ」という考え方も、そうした背景から生まれた可能性があります。

3. 【講義+体験】くるくる服のさすてなぶる

(講師)ごみの学校

牧野早春(まきの さはる)氏、藤井るな(ふじい るな)氏

ごみに関する技術や仕組み、法律など正しい知識・情報を伝えることで、「当たり前」が変化しわくわくする社会をつくることを目指しています。

これまで合計7000名にごみに関するセミナー・ワークショップを実施し、facebookグループ「ごみの学校」3200名超えのコミュニティを運営しています。



・使い終わった服は、66%焼却、15%がリサイクル、19%がリユースされている。

服を服のまま使うリユースがなぜ進まないかというと、

- ・中古品を購入することに抵抗がある方が多い
- ・中古を購入するより新品の方が安い 等があげられる。

・リサイクル、リユースするためには、服の分類が不可欠である。
色々な種類の服を5つ（国内リユース、国外リユース、ウエス、反毛、焼却）に分類した。

・それぞれの班で、服の素材や汚れ、見た目を確認しながら分類した。

・フリースは反毛を行うと、ほこりのようになってしまうので、基本焼却になる等、物によって判断が分かれるものがあり、班内で議論が行われ分類されていた。

・どの班も国内リユース品に分類された服は非常に少ないことに驚いていた。また本来は100種類程度の分類になることを聞き、服のリサイクル・リユースの大変さ、難しさも体感した。



・分類した一つ「反毛」は、不要になった衣類や廃棄された繊維を再利用する方法である。複数の機械や道具を使い、反毛体験も行った。

・1つ目の機械で布の繊維をほぐし、2つ目の機械で綿状に戻した。その後、綿を糸にする方法と同様に、糸車で糸を紡いでいく。今回は、手元で行う道具を使って行ったが、糸を紡ぐには集中力があるため、とても難しかった。

・参加者から、「反毛から作られた場合、それは一度誰かが着た洋服と変わらないということですよ。」というご意見をいただいた。この意見から、リユースが苦手な方であっても、反毛を通して結果的にリユースされた素材を身に着けている可能性がある、ということが分かった。

・最後にカーテンの端切れで「さすてなぶるバッジ」を製作した。カーテンは窓の大きさにカットする際、端切れが生じる。大きい端切れの場合はカバンなどにリメイクする作家もいそうだが、小さい端切れは使う場所が少ないため、今回は「さすてなぶるバッジ」という形でリメイクし、新しい価値を生み出した。



4. 東京都の取組紹介

5. 閉講挨拶、アンケート記入、終了